

---

# 奇跡未来堂へようこそ

七英雄

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

奇跡未来堂へようこそ

### 【Nコード】

N0307C

### 【作者名】

七英雄

### 【あらすじ】

難事件、謎の事件、怪事件、普通の事件、人探しから、皿洗いまで、なんでもこなす便利屋、【奇跡未来堂】が今日も行く。さあ、何か事件はないかい？なんでも解決してあげるよ。現在更新が怠っております。申し訳ありません。

**序章 奇跡未来堂！ただ今参上！ その1（前書き）**

ありきたりのベタな展開で、先も読めるよくある話ですが、よろしくお付き合いください。

## 序章 奇跡未来堂！ただ今参上！ その1

会社からの帰り。家へと向かう道は漆黒の闇と共に覆い被さって、永遠に辿り着くことは有り得ないように思えた。

それでも前に進むしか選択肢はない。途方に暮れるわけにはいかない。唯一の安らぎの場所へと一刻も早く戻らなければ。  
いや。

逃げ込まなければ。

早見真紀子は足早にマンションに向かった。

シャルムマンションの5階に真紀子は住んでいる。

憧れの1人暮らし。自分の城を持つために真紀子は時間を惜しみなく使い探した。妥協を許すわけではなかったが、どこをどう探しても理想の場所は見つからなかった。自分の気持ちに妥協を許した範囲で決めたのがこのマンションだった。

真紀子はマンションに入る前に振り返る。誰もいない。真紀子は安堵し、入っていった。

エレベータのボタンを押した。

こんな時間になると誰も使用していないのだろう。既に1階に到着していた。ドアが音もなく開く。

真紀子は素早く乗り込み、5階のボタンを押して「閉」のボタンを連射した。したところで早く閉まるわけではなかったが、気分的にそうしたいのだ。

ぽーん。

閉まる時の合図音が鳴り、扉が動き出した。

真紀子は、ほっ、と溜息をもらした。エレベータ内は密室になるが、誰にも邪魔されない空間である。

後は、5階の家に帰り、一息ついて、お酒でも飲みながらゆっくりすればいい。明日は休みだ。友達の亜紀と一緒に買い物でも行こうか、この前コンパで知り合った恭介をデートに誘ってみようか、

真紀子の意識は明日という未来を意識していた。

扉が閉まる寸前。

がごっ。

外側から突然現れ出た人の手が、閉まる扉を塞いだ。扉は再び開

く。

「ひっ…」

真紀子の搾り出したような細かい声が喉から鳴った。

## 序章 奇跡未来堂！ただ今参上！ その2

ぴぴぴび…。

段々と大きく鳴る携帯電話のアラームにようやく気づき、おぼつかない手が電話の上を行ったり来たりしながらやっと止めることに成功した。

むくつ。

寝癖をつけたその男は、頭を掻き耄り、欠伸をしながら起き上がった。

「ふああ…」

まだ寝足りないといった表情で、時計を見る。

午前7時。

「うあつ、7時?!」

こんな時間にアラームを設定した覚えはないと思った途端、今度はアラームではなく携帯電話が鳴る。

着信は、久遠遥。着信音は、仁義なき戦いのテーマだ。

「……」

「おはよー、キセちゃん。起きた？起きてた？まだ寝てた？」

「お前か、あの目覚ましは」

「うん、うん、昨日こっそり設定してましたー。作戦大成功ー！」

「早過ぎるだろうが」

「でもでもねー！予想通りー！大事件発生ですよ！キセちゃんすぐに事務所に来て来てね！」

一方的に電話は切れた。

男は携帯を投げて、ベット代わりにしていたソファに寝転がった。  
「…ったく。事務所って…ここだろうが。あの馬鹿女」

男の名前は、黄石和也。

『おういし かずや』と読むのだが、『黄石』が『きせき』とも読めるので、皆からはそのまま『キセキ』と呼ばれている。

本人も「奇跡」という意味で気に入っているのだが。

年齢24歳。男性。独身。身長170センチ（自称）。体重60キロ。黒髪の長すぎず、短すぎず。体型は細身。比較的どこにでもいる顔立ち（特徴がない）。

一応事務所の責任者ということになっている。

久遠遥。

『くおん はるか』皆からは『ハル』と呼ばれている。事務所の経理などの事務的な仕事が主で、キセキの秘書という位置にいる。

年齢21歳。女性。独身。身長158センチ。体重45キロ（自称）。軽く茶色に染めて肩のあたりまで伸びた綺麗なストレート。細いなりのそこそこなプロポーションだが、本人は胸のなさに悩みあり。街を歩けば必ず振り返られるほどの美人。ナンパ、スカウト当たり前。それが嫌で引きこもり、現在ネット遊びに夢中。あらゆる情報をネットから探ることを趣味としている。独自のネット情報屋もいるそうだ。

特技は「明日何か凄いいことがあるかも」程度の予知能力。これが不思議と百発百中の確率。だが内容まではわからないので、「勘が鋭いね」止まり。

つまり今回の、目覚ましの件は、前の日にその予知で「朝に何かある」と察したハルが事前にキセキの携帯電話アラームをセットしたということである。

難事件、謎の事件、怪事件、普通の事件、人探しから、皿洗いまで、なんでもこなす便利屋。

【奇跡未来堂】

それがキセキとハルが所属する事務所の正式名称。  
メンバーは全部で5人。それぞれがそれぞれの特技を駆使し、未知なる事件に挑む。

今日もまた、新たな事件が、現れる…。

序章：奇跡未来堂、ただ今参上！



## 序章 奇跡未来堂！ただ今参上！ その3

午前10時。

久遠遙ことハルがようやく出勤してきた。

ミニスカートで、珍しくもなくなったヘソ出しファッション。挑発的な服である。更にはその美貌だ。だれかれ構わず男達が振り返るのも納得がいく。

「おはよー、キセちゃん」

不機嫌極まりない顔をしているキセキを見て、ハルは自分の遅く来た時間を悟った。

「ごめん、ごめん、さっきまでネットで出会い系のメールのやりとりしててね、それで…」

「朝の7時に起こす意味がわかんねえ」

腕組みしたまま、キセキはハルをジロリと睨んだ。

困った顔をしたハルだが、すぐに開き直った。彼女のもう一つの得意技は開き直りである。

「だから、どしたん？ いい、キセちゃん、早起きは、なんとかのなんとかって言つてね、とつつつても良い事なのよ、あたしがそういう思いで起こしてあげたのになんで怒ってんの？ 馬鹿じゃないの？ 阿呆じゃないの？ じゃあまた寝れば？ おやすみ」

キセキもわかって言っているのだが、こうなるとハルの機嫌はナカナカ直らない。いつものことだ。

ハルは、ふん、と踵を返して、自分の席に着いた。忙しそうにパソコンのキーボードを叩いているが、きっとプライベートなメールが何かだろう。キセキはやれやれと背伸びをした。

「ところで他の皆は？」

奇跡未来堂はキセキとハルを入れて5人の人間で成り立っている。基本的なスタンスとして、バラバラで案件を扱うのではなく、一つの案件を全員でこなしていくスタンスなので、仕事がない時は好き

勝手に遊んでいるのである。まさに今がその仕事がない時だった。  
「あたしが、知るわけないでしょ」

そっけなく返ってくる言葉に苦笑しつつ、ハルが朝言っていたことを思い出した。

『予想通りー！大事件発生ですよー！』

「なあ、ハル、朝言ってた大事件ってなんだ？」

キセキの発言にハルは慌てた。

「あー！忘れてたー！そうそう、大事件よ、キセちゃん」

内容は簡単になるところだった。

今朝の5時頃、新聞配達の人が、マンションのエレベータ入口で女性の死体を発見。警察に通報。身体を数箇所も刺されての失血死のことから殺人事件と断定。

被害者はそのマンションで一人暮らしの早見真紀子、22歳会社員。

死亡推定時刻は、午前1時。

目撃者なし。

「これのどこが大事件なんだい？」

「へっへっへー。これからよ、これから」

ハルの機嫌はすっかり元に戻っている。

「いい？問題は死亡推定時刻よ」

「午前1時だろ？」

「うん、1時は1時なんだけどね、午前1時10分26秒よ」  
自慢気にハルは言った。

「ふーん、1時10分26秒びよ…。ちよつと待て」

「あ？わかつちゃった？気づいちゃった？さすがキセちゃん」

「なんでそこまで正確な時間がわかるんだ？」

「でしょおゝ、じ・つ・は・ね、エレベーターの中にカメラがあったのでしたー!」

キセキは拍子抜けだというジェスチャーの意味で両手を大きく広げた。

「だったら、そこに犯人が映ってるってわけだ。事件も解決。大事件でもなんでもないな」

待ってましたとばかりにハルはにやりと笑う。ネットで仕入れた情報なのだろうか。

キセキもその笑みを見て、自分の考え通りではないことを悟った。「違うのか…?」

「確かに早見真紀子さんは、その時刻に死んだ。その映像もカメラに映っていた。でも…肝心の犯人が映ってないの」

キセキの顔が先程とは一転真剣になった。

「つまり…早見真紀子は勝手に1人で失血死をしたといういことか?」

「大事件でしょ」

「こんこん、と扉をノックする音。」

「よお」

「どうぞ、という間もなく、顔馴染みの刑事である御園生直樹が扉を開けた。」

刑事、御園生直樹。

『みそのう なおき』 現役の刑事。『ミソ』と呼ばれている。

45歳。子供が2人いたが、先日離婚したために、今では月に1度しか会うことが許されない。

昔は暴走刑事とまで言われていたイケイケの人間だったが、行き過ぎた捜査のせいで締め出しをくらい、出世街道からも外れ、若手に次々と先を越され、現在に至る。

どういうわけか、事件の大小関係なく、あらゆる情報を奇跡未来

堂へ流してくれている。

苦労しているのか髪は真っ白で、染める気もなく、第一印象だと高確率で60歳以上に見られる。

体育会系の巨体で柔道の腕前は相当なものらしい。身長178センチ。体重80キロ。普通に話していても低くよく通る声は聞いていなくても嫌でも耳に入ってくる。

「あー、ミソちゃんだ。久しぶりー」

ハルが嬉しそうに指差して飛び跳ねた。

「よお、ハル、相変わらず可愛いな」

「いやーだ、ミソちゃんたらー」

「けっ、何の用だよ、こっちは別に何も無いぜ」

冷たくキセキは言った。

「まあ、お前になくても、俺にはあるんだ」

わかるだろ?…と言いたげなその視線。キセキは、はーっ、息をついた。

「今朝の事件かよ」

「まあ、そうだな」

ミソはクリアファイルをキセキに投げつけた。

警察の丸秘ファイルだ。ミソは勝手に持ち出して、キセキによく見せるのだ。

「概要は知ってるんだろ?」

説明は不要とばかりにミソは聞いてきた。

「…まあね。女が死んだ場面はカメラに映ってるが、犯人の姿が映ってない」

「そうだ。これは、もう、あれだな、お前らとウチのどっちが先に解決するかだな」

ふんっ、とキセキは鼻を鳴らす。

「それで俺らの情報も使い分けながら、手柄を独り占めってわけか」

「心配すんな、俺にはもうそんなチャンスはねえよ」

キセキの皮肉を軽く受け流す。

「まっ、別にどーでもいいが、犯人の姿が映ってないってことに興味がある。簡単な事件だな」

キセキは立ち上がった。

「きゃー、キセちゃん、やる気になったのねー、久々久々」

ハルが興奮してまた飛び跳ねた。

「んじゃま、奇跡未来堂、その事件の解決、承った！」  
ぱちん。

キセキは指を鳴らした。

## 序章 奇跡未来堂！ただ今参上！ その4

「まずは、2人を呼ぶんだ」

キセキはハルに命令した。残りのメンバーを集めさせる気なのだ。  
「ぶー。自分で呼びなよー、キセちゃん」

面倒臭そうにハルが言った。だが、そういった仕事は事務の仕事である。

「頼むよ、5人揃わないと、解決できないからな」

キセキの言葉にミソは、ぴくん、と反応した。

「…なあ、今、5人って言ってたけど…」

「ん？俺達、奇跡未来堂のメンバーは5人だよ、知ってんだろ？」

「いや、そ、そうだっけ？でも、2人を呼ぶって言ってたじゃないか」

ミソの疑問はもつともだった。

キセキとハル。そして、今から呼ぶ2人。どう計算しても4人である。5人にはならない。

「あとの1人はどうしたんだ？」

ミソの質問に、キセキとハルは、きょとん、とお互い顔を見合わせた。

そして、交互に喋った。

「何言ってるのー、ミソちゃん」

「もう1人はあんたじゃねーか」

「……」

「…ったく、今更そんなわけのわからないこと言うなんて。自覚が足りないぞ、自覚が」

「…って、いや、ちよっ…待て！」

ミソは叫んだ。

「俺？俺が5人目？俺メンバーの中に入ってるのか？」

確認するように聞いた。

2人の「うん」という頷きを見て、ミソは気が遠くなるくらい  
立ち眩みを覚えた。

「俺は刑事だぞ、警察だぞ、なんでお前らの仲間なんだ？メンバー  
なんだ？てゆうか、いつからそんなことに…」

動揺しながらミソは言った。

それを冷静に受け流しながらキセキ達は答える。

「えー、だって、ミソちゃん、初めて会った時から仲間じゃん」

「そーそー、あの『ゴリ荘殺人事件』の時な」

「うん、あれはすごかったね、だって、殺された人が皆ゴリラ似で  
さ……………」

思い出話を始めた2人を見ながら、ミソは「マジかよ…」と呟い  
た。

刑事、御園生直樹。

追加。

奇跡未来堂の一員。

特技は。（これを特技と呼ぶのは疑問だが）

『警察の特権』

30分後。

「こんにちわ」

黒い学生服を着たメガネの少年が事務所に入ってきた。

「おう」

キセキが手を挙げて答えた。

「どーも、キセキさん。それと、ハルさん。…あつ、ミソさんも。  
久しぶりですね」

「…う…うむ」

自分がメンバーだったのがよほどショックなのだろう、ミソに最

初の元気はない。

「あー、モー君！久々久々！元気してたー？学校どうー？部活はー？彼女はー？彼氏はー？」

ハルが少年を見つけてハシヤいだ。

「ええ、久しぶりですね、元気でしたよ、まあまあかな、入ってないですけど？いません。僕は男ですよ」

少年は、ハルの質問責めに戸惑うことなく、素早く順番に返答した。

森岡元昭。

『もりおか もとあき』現役の高校2年生。17歳。  
苗字からなのか、名前からなのかは、もはや忘れ去られているが、皆からは『モー』と呼ばれている。

完璧な文科系でスポーツは大の苦手。その代わり、作戦を練ったりする発想がずば抜けていて、奇跡未来堂の頭脳ともいうべきポジシヨン。

これがまた微妙なのだが、本人曰く、頭が良いということと、作戦を練る頭は別物だそうで。頭が良いという訳ではない。確かにそんな秀才がいれば、事件なんて、1人で充分解決できる。

つまり、彼は『的確な助言や何か行動を起こすための段取りが上手』ということが、彼の特技のようだ。

髪型は坊主。ガリ勉メガネ。身長165センチ、体重55キロ。

趣味はスパイ物や推理小説を読むこと。なんでもその好きな小説の主人公が坊主だから、髪型を合わせているらしい。

「今朝の事件を知ってつか？」

キセキが言った。

モーは首を振る。



「いいえ、知りません。何かあったのですか？」

「はいはい！あたしに説明させてー！」

横から飛び出してきたハルがこれまでの事情を話す。モーは興味津々に聞いている。

「なるほど、これは面白そうですね。勿論僕達でやるんでしょう？キセキさん」

「あつたばーよ」

キセキは自信たっぷりに言った。

「それにしても…おせーな」

最後のメンバーがまだこないの、苛立ちを隠せないキセキ。

「あの人は、いつも、こんな感じですから」

笑顔でモーが慣れましたよと言った。

「ビューティーは時間にルーズだよねー」

ハルも気にしない口ぶりでキーボードを叩いている。  
きい…。

事務所の扉が開く音。

「やつときやがった」

キセキが舌打ちした。

そこに現れたのは、ありえないくらいの厚化粧で巨乳の女だった。

「うつっ…飲みすぎた…」

頭を抱えながら、その女はよろける様に入ってきた。

夜通し飲み明かしたのか、その厚い化粧が崩れかかっている。

「ビューティーおそーい」

ケラケラとハルが言った。コップ一杯の水を差し出す。

「ごめんねー、ハルちゃん」

ビューティーと呼ばれた女は辛そうにそれを飲み干した。

「さ、会議すつぞ」

そんな事は知らんぷりで、キセキが立ち上がった。

山路真美。

『やまじ まみ』名前に『美』という文字があるために、皆からは『ビューティー』と呼ばれている。』というか、呼ばせている。

32歳。離婚歴3回。子供なし。

クラブを経営しているママ。年齢よりも上に見られがちで、その原因の1つは匂いが漂う厚化粧。

身長163センチ。体重？キロ。あまりにも巨乳なので太って見える。ハルは胸に対してだけ憧れを抱いている。

特技は、警察の情報に匹敵するほどの独自ルートの情報網。たまにその情報をミソが利用するほどの信憑性がある。

…が、問題がある。彼女の情報はお店のお客から得るものだが、肝心の彼女がその店を人任せで出勤しないのだ。こうなると欲しい時に情報は貰えず、ビューティーの気まぐれで店に出た時だけの情報しか得られない。

## 序章 奇跡未来堂！ただ今参上！ その5

「さて、始めるか」

キセキが司会を務めた。

「今朝の事件の内容をミソから報告してもらおう」

ハルのふてくされた顔を横目にミソが申し訳なさそうに話し出した。

「今朝の5時頃、新聞配達員がマンションのエレベータ入口で女性の死体を…」

簡単な説明が終わった。

それを確認してキセキが言った。

「何から始めようか」

「まず、その防犯カメラの録画が見たいですね」

メガネの位置を指で直しながらモーが言った。

「うむ、実はあるんだ」

ミソはDVDを出した。

「あんのかよっ！早く言えよ」

「まあ、いつも通り全員が揃わないといけないと思ってな…」

ミソがDVDをハルに渡す。役目を貰ったハルが嬉しそうに準備を始めた。

「話を聞くだけだと、何年か前の事件に似てないですか？」

モーの問いにぐったりとしていたビューティーが身を乗り出した。

「2年前の『呪いの人形事件』よ。あれは、犯人なんていなくて非科学的な呪いというありえない力が本当に働いて起きた事件で、忘れもしないこの美人で聡明なあたしが命を落としそうになったという伝説の事件で…」

「始まるぞ」

ビューティーの饒舌を無視してミソが冷静に言った。

画面が映し出される。

当然音声は出ないし、今時珍しい白黒画面である。

事件当日。午前1時。エレベータ内。

カメラの位置は、エレベータ内の、右上の斜めになっている。

つまり、画面上でいえば、エレベータに乗り込む時に顔は見えるが、降りる時や、ボタンを押したり、階に到着するまでの待っている間は、カメラに背を向けることになる。

しかも角度が非常にキツく、奥に入り込むと頭だけしか映らないし、白黒であるために、扉が開いた場合、外の様子がわからないという欠点がある。

「おいおい、こんなんで判断しろというのかよ」

呆れたようにキセキは言った。

「仕方ない。防犯カメラはここにしかないんだ。玄関にも普通はあるはずなんだがな」

「あつ、そろそろですよ」

モーが画面を指差した。

扉が開く。

1人の若い女性が素早く乗り込んできた。

被害者の早見真紀子だ。

真紀子は乗り込むと5階のボタンを押した。

そして「閉」ボタンを数回連射している。

よほど早く閉まって欲しいのだろう。

扉がゆっくりと閉まり始めて、真紀子の連射は止まった。

閉まる瞬間。

真紀子の身体が後ろに仰け反るように下がる。

扉が開いた。

真紀子は「開」「ボタンは押してない。」

画面の中は、報告通り、真紀子以外の人間はいない。  
画面が揺れる。

暴れているのだ。

真紀子の身体が痙攣するように動いている。

死因は数箇所数回刺されたための失血死。

…であれば、今、刺されているのか？

やはりそうだった。

鮮血が飛び散っていった。

真紀子が崩れ落ちて、扉が閉まる。

エレベータは5階に到着し、扉が開く。

降りることなどもはや不可能だった。

再び扉は閉まる。

2・3分して、まだ息があつた真紀子が動き出した。

白黒からでもわかる、血まみれの指が1階を押した。

エレベータは動き出して、1階に到着、扉が開く。

真紀子はまだ生きていた。

懸命に自分の身体を奮い立たせ、這い蹲りながら、エレベータか

ら出た。

そして。

真紀子は画面から離れていった…。

その先で真紀子の力尽きた死体が見つかることになる。

## 序章 奇跡未来堂！ただ今参上！ その6

沈黙が流れる。

「なかなか壮絶な映像だったな」

キセキが口を開いた。

「ほんとに犯人映ってないねー」

ハルが驚きながら感心した。

「警察の判断はどうなんですか？」

モーがミソに聞いた。

ミソは言いにくそうな表情になった。

「まあ、本物のテープってこと…かな」

「色々疑問が浮かび上がったな」

「じゃあさ、発表しよー！おー！」

ハルが右手を高々に挙げた。

「指紋はどうなんだ？」

「目撃者は…いないのね」

「なら、容疑者もないってことか？」

「被害者が襲われている時の、画面なんですけど、被害者自身映ってないですね」

「早見さんは何かから逃げているようだったな」

「白黒見にくーい！」

「この子、可愛いわね」

「ああ、俺も思った。男いるのかな」

「ちよつと、話が違いますよ」

「そうだ、真面目に考えろ」

「考えてるさ、男の線もあるからな」

「いるかもしれんぞ」

「え？なんでなんで？」

「指輪をしていたからな、しかも左手に」

「ちょっとお、最近は大アクションでしてる人もいるのよ、それだけにいるなんて」

「そうだ、それだけで決めつけるな」

「お前：状況わかってるのか？」

「キセちゃん、死人に妬いてる」

「ふ、不謹慎ですよ、いい加減にしてください」

「モーの言うとおり！キセ！黙ってな！」

「なんだよ、俺一人のせいだよ」

「てゆうか、画面悪すぎだぞ」

「そうですね、正直彼女本人なのかどうか…」

「可愛いつてんだろ！」

「だから見にくいんだよ」キセちゃん

誰が誰だかわからないくらいに台詞が入り乱れて、意味のある意見、ない意見が飛び交った。

こんな状態が1時間くらい続いて、落ち着いてから再検証が始まる。

指紋。

「エレベータのドアが開いた時って閉まる直前でしたよね」

モーが何度もDVDを確認しながら話す。

「…ってことは…外で誰かがボタン押して開けたか、間に手を入れて開けたか、の2パターンだな」

キセキがミソを見ながら言う。返答しろという無言の態度。

「指紋はある。だが、断定することができない。あのマンションの住人達が毎日のように使っているんだ」

「でも、新しいものや古いものは断定できますよね？」

モーが冷静に言った。

「新しいものを限定して容疑者を割り出した方がいいんじゃないですか？」

「現在割り出し中だ」

「だったら、それは後からの報告として…だ。真面目な話、早見真紀子の男関係はどうなんだ？」

今度は真剣にキセキは聞いた。

早見真紀子、交友関係。

「とりわけ仲の良い友人はいなかった。ただ、1人だけ、会社の同僚である大友亜紀とはよく食事や買い物にいくような仲だったみたいだな」

「へー、ミソちゃん、すごい、調べてるうー」

「それが出来なきゃ、この職就いている意味がない」

「男は？」

キセキが聞いた。

「あんだ、随分そこに拘るねえ」

ビューティーが呆れ顔で言った。

「男の匂いがすんだよ」

ミソはメモ帳を捲る。年季の入った古い手帳だ。

「男は…ここ数年いないな。最近だと高木恭介という男と知り合いになったそうだが、友人ということだ」

「録画を観る。彼女は何かに逃げるような勢いでエレベータに飛び込んできた。こんな夜遅くに女があんな状態になる理由は…なんだ？」

キセキが皆を見る。

「…夜が怖い」

ビューティーが言った。真の答えではないことをわかっている声。  
「心細いんでしょうね」

モーが喋る。

「足が速いんだよ、きっと」

ハルが陽気に話す。



全員の目がミソに注がれる。

最後の決めは任せたという視線だった。

ミソは溜息をついた。

「ストーリーか…」

「そーゆーこと。犯人が映ってない録画はまだ謎だが女が怯える要素はそれしかない」

キセキがぱちんと指を鳴らした。

「そうになると、怪しいのは、その高木恭介って奴だな」

「いえ、キセキさん、あと1人いますよ」

モーがメガネを触りながら切り出した。

「えゝ？いないよゝモーちゃん。そんな人ゝ」

「いますよ、もう1人、ミソさん、さっき言いましたよね、『ここ数年いない』と。…という事はですよ…」

ビューティーが両手を叩いた。

「なるほど、昔の男ね。さすが、モー君。鋭い、鋭すぎるわ。最高」

「…ふん。…で？それに対しての答えは…？」

再び皆の視線がミソに注がれた。

ミソは気まずそうに咳払いをしながら、「調査中だ」と言った。

## 序章 奇跡未来堂！ただ今参上！ その7

「では、最大の難関へと問題を移そう」

「そうですね、そもそも、この問題がなければ、普通の事件ですからね」

犯人が防犯カメラに映らない。

「やっぱり、呪いじゃないの？その、高木恭介とか、昔の男のさ、2年前の『呪いの人形事件』とかあったじゃない」

ビューティーが先程の話を言い出した。

「それもあるけどさー。ビューティー、あの去年の夏の『恨み饅頭事件』の方がすごかったじゃん。あんなに饅頭口に入らないよー」  
「いやいや、それをいうなら、『藁人形事件』だ。釘を刺された藁人形の中に本物の人間が入っていたというあの事件は本当に大変だった。我が警察の力を持ってしても犯人を捕まえるのには時間がかかってなあ…」

ビューティーとハルとミソの昔話が始まった。

「おい、話を止めるよ」

話が違う方向にいつてしまったことに不機嫌なキセキはイライラと言った。

「そういえば、あの時キセキさん、藁人形の中に入れられたんですよ」

モーが笑顔で言う。

「そー、そー、あん時は、ヤバかったよ、あと少しで釘を刺されてなあ……って、うるせー!!」

キセキは怒鳴った。

「昔話はいいから、今の話をしろ!」

はい、はいと4人は姿勢を正す。

「一番可能性があるのは…画像に手を加えてることですよ」

「うむ、だが、それはない」

モーの質問をミソが返す。

「なんでわかるんだ？」

「最近はこの手の事件も増えててな、うちの中にもそういうのがわかる人間を置いてるんだ。そいつがはつきりと言っていたよ、CGなどの手は加えられていない…ってな」

「そのマンション…管理人はいるのか？」

キセキが唐突に聞いた。

「ん？ああ…一応な、いるよ」

「そいつの詳細を調べてくれ」

「今調査中だ」

「この管理人が、もし、被害者と深い関わりがある奴なら、この事件は一気に解決に向かうぞ」

自慢気にキセキは言った。

「どういうことですか？」

モーが問いかける。

「この監視カメラは恐らくビデオテープ録画になっているタイプだろう？」

ミソが頷く。

「…であれば、ビデオテープそのものに手を加えたのであれば、バレないな」

「なるほど、そういうことか、管理人が主犯、もしくは共犯のケースか」

「つまり、この殺害現場の録画は、自作自演、1人芝居のもので、本当の画像は処分されてる。管理人が関与してなければ、出来ない技だな」

「…わかった。早急に結果出させるようにしよう」

ミソは携帯を持って外へ出た。

「さーで、これからどうする？」

キセキが周りを見ながら聞いた。

「僕勉強があるんで…」

モーが口火を切った。

「あたしは睡眠」

ビューティーが冷たく言う。

「ちっ、どいつもこいつも。俺は、その現場となったマンションへ行くぜ。なあ、ハル、行こうぜ」

キセキのご指名にハルは極端に驚いた。

「えっ、あのー、ハルちゃんね、これから調べものをしなければいけないのー。メールの受信という調べものを…」

「あーあー、もういい！俺1人で行ってくらあ！」

キセキの呆れた声に反応するように、3人が同時に「行つてらっしゃーい」とハモった。

シャルムマンション。

早見真紀子の殺害現場。

黄色のテープが引かれ、数十人の警官があちこちを調べている。さすがにこれでは入りようがない。

キセキが諦めてその場を離れようとした時、携帯電話が鳴る。

ミソからだった。

「キセキだ」

（おう、さっきの管理人の話だな、24歳という若い男で、北村茂という名前だ）

「被害者との関連は？」

（まだわからんが、住所まではわかったぞ、ここから遠くない）

「教えてくれ。それにしても随分と若いな」

（うむ、これはひょっとしたらひょっとするぞ）

「まあな、今日のこの事件があつたのに、管理人が出動してきていない。問題だろう、これは」

住所を聞いたキセキは急いでその北村茂の家へと向かった。

シャルムマンションから歩いて10分程度。立派とはいえないア

パートがその住所だった。

「…ぼろっちい所だな…」

かん、かん、かん。

キセキは階段を上がり、「北村」の表札を見つけた。  
静かにドアノブに触れて回してみる。

普通かかっているはずの鍵が…。  
かかっていなかった。

「北村さん、すいませーん」

キセキはこん、こんとノックをしながら呼びかけた。

無言。返事はない。

嫌な展開を思い浮かべる。

携帯を持ち、ミソへ電話をかける。

（御園生だ）

「ミソ、ヤバイぜ、ビンゴだ」

（どうした）

「北村の家にいるんだが、鍵がかかってない、しかも呼びかけても  
反応もない」

（寝ているってことはないのか）

「今までの経験上の感覚ってやつだ。100%寝てるってことは…  
ない。いいか、俺はドアを開けて侵入するぞ」

（待て、俺たちが行くまで待つんだ）

「だったら早くきな」

キセキは電話を切る。

深呼吸をし、ドアをゆっくりと開けた。

き…。

建てつけの悪い音が響く。

「北村さん。お邪魔しますよー」

大きな声でキセキは言うが、当然ながら返答はない。  
みしっ。

床が軋む。

玄関、台所、奥が居間。寝室兼用なのだろう、居間の様子がわからない。

キセキは恐る恐る居間の方へと進んでいった。  
嫌な予感は更に深まる。

ぴーんと空気が張るのを感じた。

居間の中の全貌が明らかになる。

キセキは除いた。思わず溜息をもらした。予感が見事的中したからだ。

暴れた形跡は感じられない。部屋の中も着衣も乱れている様子は  
ない。

だが、これは現実だ。

キセキは…。

北村茂の…。

無残な…。

包丁を突き立てられた…。

刺殺死体を…。

…発見した。

「…まったく、動くなと言ったろーが」

ミソが怒った口調でキセキに言った。

北村茂殺害現場。アパート。このシャルムマンション同様、黄色のテープで囲まれて、警官がわらわらと騒いでいる。

「仕方ねーだろ、気になったんだからよ」

キセキは半分ふてくされている。

「ここは俺がなんとかするから、早くお前はこの場を離れろ」

ミソが追い払うようにキセキを押した。キセキは何か言いたそうだったが、渋々その場から離れた。

「それにしても、妙な展開になっていくな…」

ミソは呟いた。

キセキの携帯電話が鳴り響く。

モーからだった。

（あつ、キセキさん！ミソさんから聞きましたよ。どういうことが説明してくださいよ！）

「どーもこーもねーよ。管理人の名前と住所がわかったっていうから、行ってみたらこの有様だ」

（それで？どう思いました？キセキさんは）

「間違いなく、今回の事件に関わっているな。しかも、格闘とかの跡はなかった。つまり…」

（顔見知り…仲間割れですね）

「そういうことだな」

キセキは不穏な空気を感じ取って、立ち止まった。辺りを見回す。  
「今はまだ現場近くだ。とにかく、皆を集合させておいてくれ。すぐに戻るから」

（了解です）

携帯電話を切る。

キセキはそこから1歩も動かないまま、しばらくじっと佇んでいた。

やがて、まるで目の前に誰かがいるかのように、言葉を発した。

「いい加減に、出てこいよ。わかってんだ」

何者かの気配を感じ取っていたキセキは自信を持って言い放った。  
…が。

10分以上経つても…誰も現れることはなかった…。

「気のせい…？いやそんなはずはねえ」

今までの経験で、この感じは何かあるとキセキは確信を持っていた。

じゃり…。

地面の小石が混じった砂を踏みつける音が後ろから聞こえた。

キセキは振り返ると、そこには女性が立っていた。



## 序章 奇跡未来堂！ただ今参上！ その8

女は怯えた表情で、がたがたと手を震わせていた。それを気にしながらキセキは静かに話しかける。

「…あんたが…大友亜紀さんだね…。早見真紀子さんの友人の…」  
女の表情が一瞬憎しみの色に変化した。

「解説してやろうか？初めは面白そうだったが、すぐに単純で御粗末な事件だったことがわかったよ。警察も手え抜いてるとしか思えねえよ」

女は何も言わない。

「いいな、一気にいくぞ、聞き逃すなよ。簡単に言ったら、嫉妬で起こった殺意だな。つまり、大友亜紀さん、あんたはコンパで知り合った高木恭介のことが好きだった。しかし、高木は真紀子さんの方に想いを寄せていた。それがわかったあんたはさぞかし憎しみ溢れただろう。その憎しみが殺意へと変わり、真紀子さん殺害を計画する。その共犯者として、シャルムマンションの管理人北村茂を利用する。北村は恐らく真紀子さんのこと好きだったのだろう。いや、むしろ異常なまでの愛情を持ち、自分が彼氏だと擬似的な錯覚すら思い浮かべた。一般的にストーリーカーというやつだ。そのことを察したあんたは協力を持ちかけた…。と。ここまでで何か間違いはあるかい？大友亜紀さん」

キセキの質問に亜紀と呼ばれた女は何も言わない。黙ってじつとキセキを見つめている。

キセキは続ける。

「トリックは至って簡単。まずは殺人場面をビデオ録画する。あの監視カメラに映っていたのは大友亜紀さん、あんたの変装ですね。あたかも犯人が映らないように自演を試みせた。血はそれっぽく見せるための演出だろう。あんた演技上手だね。北村の協力があれば、そんなことは造作もないことさ。真紀子さんの服装を随時チ

エックして、似せた服を着てれば白黒映像だからバレることはない。そして、真紀子さんを殺して、録画テープを入れ替えた…。最後に口封じで、北村を殺す…。以上が、今回の事件の全てだ。おっと、後は、先に自作自演の撮影通りに血を付けたり小細工しないといけなかったってことか」

ひょお…つと風が吹く。

キセキがぱちんと指を鳴らした。

「以上が、真相だ。ご清聴感謝します」

わざと丁寧な礼をする。

大友亜紀は手で口を押さえたまま震えている。

「何か言いたいことはあるかい？ 亜紀さん」

俯いた亜紀の口から漏れたのは笑い声だった。

「くつくくつ…」

亜紀は肩を震わせて必死で笑いを堪えている。

「貴方って…想像力豊かですね」

「なに？」

亜紀は髪を掻きあげながら不敵に微笑む。キセキの背筋に冷たいものが通過した。

「いい？これは全て貴方の架空の考えよ」

「極めて、真実に近い、近すぎる架空の考えだな」

「目撃者は1人もいないのよ？」

「あんたが北村を殺したからな」

亜紀は人差し指を立てた。

「根本的にどうしようもないことがあるわ」

微笑は絶えない。

「私、アリバイがちゃんとありますけど？」

「そりゃ、そうだ、自演の撮影時間と殺害時間が合うわけがないから……」

キセキの言葉に亜紀は自分の言葉を被せた。

「そんなの当たり前よ、私が言ってるのは、その北村って人が刺さ

れた時もよ。昨日今日、私はちゃんとアリバイがあるわ」

「はっ、何言ってやがる、現場近くにいる時点でおかしいじゃねえか……」

刹那。

キセキの脳に電撃が落ちる。

キセキの脳裏に新たな可能性が生まれた。

仮に、本当に、大友亜紀に、アリバイがあるのであれば……。

「……まさか……もう1人……いたのか？共犯者が……？そいつが、北村を、真紀子さんを……」

亜紀は満面の笑みを浮かべた。まるで真っ白な笑顔の仮面を被ってるかのような冷たい顔だった。

「うふふ……貴方には……わかるでしょ？もう1人が誰なのか……」

キセキの結論は既に達していた。

「……早見真紀子さんの……昔の男……だな」

「だ……い、せ……い、か……い」

亜紀がさよならと手を振った。

## 序章 奇跡未来堂！ただ今参上！ その9

「キセちゃん、後ろ〜！！」

突如ハルの大声。

瞬間、キセキの後ろに影が覆い被さる。一緒に殺意という悪寒も。キセキは転がるように横へ跳んだ。

そこにはナイフを振り上げていた男がいた。

「こいつが…」

「早見真紀子の昔の男、うきあししょうへい浮足将兵だ」

追いついてきたミソが付け加えた。

「良かった〜キセちゃん」

ハルが泣きそうな顔で抱きついた。

キセキの周りに、モー、ハル、ビューティー、ミソの奇跡未来堂のメンバー全員が集った。

「お、お前ら」

「ハルさんのいつも予知ですよ。キセキさんの身が危ないって」

モーが安心したように言った。

「ハルの予知は外しがないからねえ。迷わずミソに電話したわよ」  
もう眠いという顔でビューティーがにやりとする。

「それで、急いで駆けつけたってわけだ。ハルに感謝しろよ」  
ミソが拳銃を取り出した。

「浮足将兵、逃げられんぞ、殺人容疑で逮捕する」

浮足はナイフを構えたままじりじりと後ろへ下がりはじめた。

「あ、あいつが、悪いんだ。お、俺を捨てて、他の男と仲良くしゃがんで…」

情けない声で浮足が話し出した。

他の警察官達が数人現れた、もう逃げることはできない。

浮足はがっくりと観念し、ナイフを落とした。

警官に囲まれ、乱暴にされながら浮足は逮捕された。

「よし、連れて行け」

ミソの指示で浮足が連行される。そこでキセキが付け足した。

「おい、ミソ、その大友亜紀さんも連行でしょ」

その言葉に亜紀は怒りを露わにした。

「馬鹿なこと言うのもいい加減にしてくれる？ 私はちゃんとアリバイがあるわ。殺したのはあの男なのよ」

「そんなもん、浮足が自供したら、終わりだぞ」

「ええ、いいわ、望むところよ。その時は裁判所で戦いましょう」  
完全に開き直った亜紀は強気の視線をキセキにぶつける。

キセキはその視線を逸らした。

亜紀の顔に勝利の笑みが浮かぶ。

「ところでさ、これ、さっきの会話なんだけど」

おもむろにキセキは録音テープを取り出して、スイッチを押す。

【「いい？これは全て貴方の架空の考えよ」

「極めて、真実に近い、近すぎる架空の考えだな」

「目撃者は1人もいないのよ？」

「あんたが北村を殺したからな」

「根本的にどうしようもないことがあるわ。私、アリバイがちゃんとありますけど？」

「そりゃ、そうだ、自演の撮影時間と殺害時間が合うわけがないから……」

「そんなの当たり前よ、私が言ってるのは、その北村って人が刺された時もよ。昨日今日、私はちゃんとアリバイがあるわ」

「はっ、何言ってるやがる、現場近くにいる時点でおかしいじゃねえか……まさか……もう1人……いたのか？共犯者が……？そいつが、北村を、真紀子さんを……」

「うふふ…貴方には…わかるでしょ？もう1人が誰なのか…」  
「…早見真紀子さんの…昔の男…だな」  
「だ…い、せ…い、か…い」  
「キセちゃん、後…」】

テープを止める。

「最後あたしの声…可愛い、可愛い」

ハルの喜びようを無視してキセキは続ける。

「気付きませんか？」

信じられなくいという態度でキセキが亜紀に問いかける。

怪訝な表情で亜紀はキセキの持っているテープを見る。

「それがなに？」

「気付いただろ？」

キセキが周りに聞く。

「ええ、あからさまですね」

モーが笑う。

「確かにな」

ミソも頷く。

ハルとビューティーには理解できない。

亜紀も同じく理解できていないようだった。

「仕方ねえな」

キセキはもう一度テープを流す。今度は範囲を狭めた。

【「あんたが北村を殺したからな」

「根本的にどうしようもないことがあるわ。私、アリバイがちゃんとありますけど？」

「そりゃ、そうだ、自演の撮影時間と殺害時間が合うわけがないから……」

「そんなの当たり前よ、私が言ってるのは、その北村って人が刺された時もよ。昨日今日、私はちゃんとアリバイがあるわ」  
「はっ、何言ってやがる、現場近くにいる時点でおかしいじゃねえか……」

「なるほどね」

ビューティーも理解できたようだった。

恐らくハルには自力で理解は出来ないであろう。

亜紀は…

今までのような余裕のある笑みはなく、正真正銘恐怖の顔でがたがたと震えていた。

「気付いたようだな」

キセキが指を鳴らした。この状況で指を鳴らした場合は、勝利の確信をしている時である。

「……ぐっ」

「大友亜紀さん、どうして、北村が『刺された』ことを知ってんだ？」

「ああ〜！そーかあ〜！」

ハルが叫んだ。

「北村が殺されたことは、確かにキセキは言ったが、どうやって殺されたのかは、言っていない。では、なぜ、北村が刺殺された事を知っているってことだな」

ミソが説明した。

それにビューティーが続いた。

「簡単よ、実行犯か、共犯者ってことよ」

改めて、キセキが亜紀の顔を見る。

「さて、大友亜紀さん、この俺を納得させる理由はあるかい」  
「……」

張り詰めた空気。

沈黙。

「真紀子が悪いのよ」

亜紀が悔しそうに話し出した。

「私は、あの子より先に恭介さんのことを気に入っていたのよ。それを、あの子が横取りして……」

亜紀はその場に崩れ落ち、泣き始めた。

「終わったな、じゃ、また頼むよ、お疲れ」

ミソは亜紀を車に乗せ、一緒に去っていった。

「それじゃあ、僕は塾に行きますね。お疲れ様でした」

モーは一礼して、足取り軽く塾へと向かって行った。

「ふわあ…それじゃあ、もう一眠りしてくるわ…」

大あくびをしながら、ビューティーは事務所へ戻って行った。

「それじゃあ、あたしも帰ろ〜っと。今日も楽しかったね、キセちゃん」

「おい、待てよ、ハル」

ハルが帰ろうとするところを、キセキが止めた。

「ん？なあ〜に？」

「まあ、その、助かったよ、お前の予知のおかげでさ。お礼に、まあ、ラーメンくらいご馳走するよ」

照れながらキセキは言った。

ハルは目を輝かせて飛び跳ねた。

「ホント、ホント？いえ〜い、やったあ〜！あたしね、あたしね、前から、キャビアっていうの食べたかったんだよね〜」

「…ラーメンだっつってんだろ〜！！」

キセキの怒鳴り声が空に響いた。



序章  
完

## 第1章 奇跡未来堂は死体を探す その1

葉月正一が朝起きたら、父も、母も、姉も、兄も、いなかった。姉や兄がいけないことは珍しいことではない。毎日のように夜遊びに没頭なのだ。知らない女を誘ったり、男に誘われたり、一体何が楽しいのだろうか。

不可解なのは、父も、母もいないことだった。

父や母の名を呼んでも返事はない。返ってくるのは静寂。どうしようもない静寂だった。

不安に駆られた正一は、隣の家や親戚、思いっくだけの友人に電話を入れた。

結局誰も行き先も居場所もわからないまま、1日が過ぎた。正一は今日外出を止めた。

次の日も、次の日も、正一は家族の帰りを待っていた。それでも帰ってこない。

兄や姉までもが帰らないことはさすがにおかしいと、2人に電話を入れるが、繋がることはなかった。

とうとう、正一は警察に連絡することにした。いなくなって、1週間。異常だ。父の会社からもどうしたのかと電話が入る。無断欠勤をしているようだった。

警察も行方不明事件として扱ってくれて、白髪で年配の刑事が担当になってくれた。顔だけ見るとなかなかやり手のように思える。

兄や姉は遊びでフラフラしているのだ。補導されて家に帰ってくるのは時間の問題のはずだ。問題は父と母である。今までこんなことはなかった。どここの家庭でもそうであろうが…。

警察の捜査が始まって、2日後。

兄と姉の死体が見つかった。

正一は驚いた。生きているはずだった兄姉が死んでいて、死んでいるかもしれない両親が行方不明のまま。

正一は、がたがたと震えだして、泣いた。

## 第1章 奇跡未来堂は死体を探す その2

すっかり冬の訪れを感じさせる涼しい風が吹き始めた。

みそのう なおき

御園生直樹は煙草を吹かしながら公園のベンチで考え事をしていった。

この度の事件のことを考えていた。行方不明の家族を搜索する担当になったはいいが、いきなりの死体発見。しかも事故ではなく殺人と断定。一気に急展開の奈落の底へ落ちて行った。

御園生直樹は簡単に考えていた。どうせ、両親は子供を捨てて逃げたか、兄弟は普通に夜遊びで仲間の家を渡り歩いていると思っていた。

そうであれば本気を出せば見つけるのは容易いことだった。

確かに容易かった。しかし、本気を出した途端見つかったのは、無残な死体だった。

「おー！ミソ！」

馴れ馴れしく御園生を呼ぶ男の声。強面の刑事を馬鹿にするような呼び名で言う奴は決まっている。

「遅いぞ、キセキ」

ミソは苛立たしく言った。どうやらこのキセキと呼んだ男を待っていたようだった。

「わりい、2度寝してな」

「全く待ち合わせという意味を知らんのか？お前中心に地球は回ってんじゃねーんだぞ」

ミソは怒り口調で言ったが、キセキは罪悪感など全然なかった。

「俺ら未来堂を呼びつけたってことは…だ。さぞかし面白れえ事件を持ってきたんだろーな」

キセキはベンチにどかっと勢い良く座った。

「あ…ああ…」

歯切れの悪いミソに疑問を感じながらキセキはミソの事件概要を聞いた。

キセキは背筋を「んっ」と伸ばして、ミソを睨み付けた。

「面白くねえ」

最初に発した言葉だった。

「普通じゃねえかよ。子供残して、親と兄弟が家から出て、兄弟の殺人死体が見つかった。あー普通普通。犯人は親だ。兄弟殺して、逃げてるんだよ。どうせ心中してるだろうから見つかるのはもうすぐじゃねえか？その正一って子供は運が良かったな小さいから見逃して貰ったんだろ」

ミソの顔がやつぱりなと言ってるような表情になる。目ざとくキセキはそれに気づく。

「…なんだよ、なんか他にあんのか」

「確かに…、これまでの話を聞いて、そう思うのはしょうがないな。てゆーか、わざとそう思うように話したんだがな。キセキ、お前、正一は何歳だと思う？」

「え？…まあ、その内容じゃあ…小学生の低学年ってトコか？」

「…」

ミソが一瞬笑った。

「違うのか？」

キセキが身を乗り出した。

「…正一は…俺と同じ年、45歳だ」

「…」

キセキは節句する。そしてすぐに冷静を取り戻し、にやりと口端を上げた。

「ほう…。てこた…話が変わってくるな…。犯人像の…」

「ああ…そうなるな？興味あるだろ？」

ミソのうまい言い回しに、キセキは、ぱちんと指を鳴らした。  
「奇跡未来堂、その事件の解決、承った！」

難事件、謎の事件、怪事件、普通の事件、人探しから、皿洗いまで、なんでもこなす便利屋。

【奇跡未来堂】

それがキセキの所属する事務所の正式名称。

メンバーは全部で5人。それぞれがそれぞれの特技を駆使し、未知なる事件に挑む。

今日もまた、新たな事件が、現れる…。

第1章：奇跡未来堂は死体を探す

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0307c/>

---

奇跡未来堂へようこそ

2010年10月11日03時06分発行